

木村 浩 著

## 『イギリスの教育課程改革—その軌跡と課題—』

イギリス教育の研究に関わって以来半世紀近くになる。この間、研究報告書・共著書等をはじめ教育・研究関連誌紙に発表したイギリス教育に関する論稿はかなりの数に達した。これらの中には、イギリス教育の現実をより深く理解する上でも、また今後のわが国の教育を考える際にも、改めて再読し、比較検討の「素材」とすることが必要と考えられるものも少なくない。

そこで、これらの書き溜めた論稿を吟味して、イギリスの主要な教育課題のうち、「教育内容・方法」に関する論稿と、「教育制度」に関するもの2領域に分類した。本書は、「教育内容・方法」に関する拙稿のうち、イギリスの教育課程（カリキュラム）改革に深く関わり、併せて、わが国の教育問題を比較検討する観点からも有益と考えられる論稿に限定して、これを収録した。イギリス教育の変革の流れを把握する際の「手がかり」ともなればという、ささやかな願いを込めてのことである。

このため、各章のはじめに「解説」を、また収録の各稿には「背景とねらい」を付記した。問題領域（8章構成—基礎学力問題、ナショナル・カリキュラム、総合学習、職業体験学習、能力別指導、教科書、中等教育修了試験、国際理解教育—）ごとに選定した総計18点の拙稿を配したが、いずれも「1944年教育法」体制下での教育論議から「1988年教育改革法」の制定施行およびその後にかけてのイギリス教育改革の展開を主題としている。

この時期は、著者が前職（国立教育研究所—現・国立教育政策研究所）に在勤していた18年間とも重なる。当初所属した第1研究部（後に国際研究・協力部に改組改称）の外国研究グループには、米・英・独・仏・ソ連の専門研究者である優れた先輩・同僚が集い、共同研究を数多く組織し外国研究を推進した。外国人研究者や研究所外の専門家を交えた研究会も頻繁に開かれた。こうして、諸外国の教育・研究情報が交わされ、互いの知見を広げる絶好の機会となっていた。有益で楽しい時間を研究所内外で共有した当時が懐かしく思い出される。

「自著」を語るついでのことだが、この研究グループ仲間のほとんどが、1990年代前半頃まで、著書や研究成果報告をはじめ全ての原稿類は「400字詰原稿用紙に手書き」が普通であった。本書に収録した拙稿のすべても例外ではない。原稿締め切りを目前に控え、鉛筆と消しゴムを手に何度も書き直しては、厳冬の戸外で深夜の天空を仰いだこともあった。

文字通りの「拙著」であるが、それぞれの稿には著者のこうした思い出も込められているのである。